

平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

系群名 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所

西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳

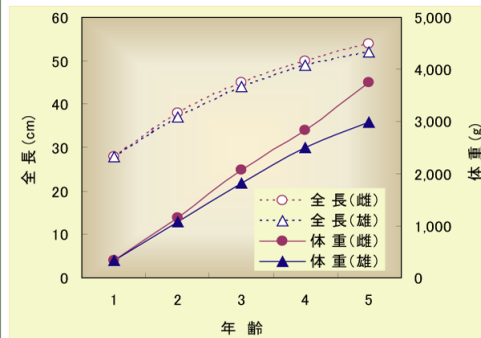
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳

産卵期・産卵場: 春期(3~6月)、秋田県天王町沿岸、能登島、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸

索餌期・索餌場: 周年、日本海、東シナ海、瀬戸内海、黄海

食性: 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成年魚以降はエビ・カニ、魚類等

捕食者: 不明

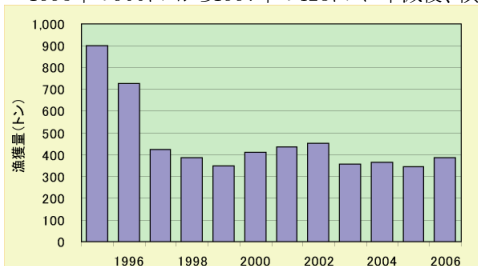


漁業の特徴

日本海沿岸では、産卵期を中心に主に定置網により産卵親魚が漁獲される。日本海西部から東シナ海の沖合では、主にふぐ延縄により、沿岸域では、定置網、底曳網、釣りおよび刺し網等により、産卵親魚や若齢魚が漁獲される。瀬戸内海では、産卵期に産卵親魚が定置網、吾智網、釣りおよび敷網等により、夏~秋季に産卵場周辺で幼魚が小型底曳網および定置網により漁獲され、秋~冬季に水道域で成魚が延縄および釣りによって漁獲される。

漁獲の動向

長期にわたる漁獲量の推移は日本海・東シナ海・瀬戸内海西部でのみ把握され、1980年代までは約1,400トンの漁獲量があり、1990年代に急激に減少し、1997~1998年以降は盛時の約10~15%の水準である。本系群の漁獲量は1995年の900トンから1997年の423トンに半減後、横ばいに推移し、2005年は343トン、2006年は387トンであった。

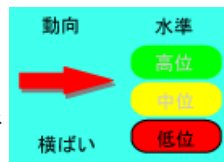


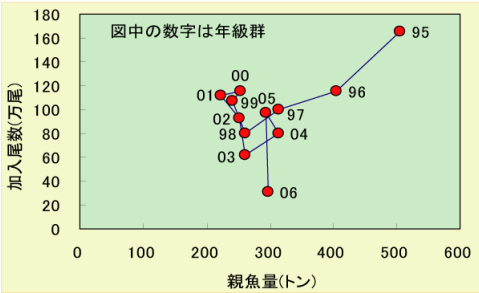
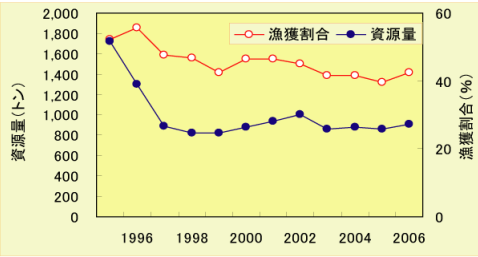
資源評価法

1995~2006年の日本海・東シナ海および瀬戸内海での年齢別漁獲尾数を合算することで本系群の年齢別漁獲尾数を推定し、自然死亡係数を0.25としてコホート解析を行った。解析年には暦年を用い、4月を誕生月とした。4歳以上をプラスグループとし、3歳と4歳以上の漁獲係数が等しいと仮定した。2006年の1~3歳の漁獲係数は過去3年間の平均と仮定した。3歳以上を産卵親魚とした。

資源状態

推定された1995年以降の資源量の推移と過去に遡った漁獲量の推移から、現在の資源水準は極めて低位だと考えられる。動向については、過去5年間の資源量推移から横ばいと考えた。特に、2006年の漁獲量および資源量に見られる増加傾向については、漁獲量、漁獲尾数、年齢組成、および漁獲係数の推移からみて、2005年級の発生が良かったことに起因していると判断し、もう暫く慎重に様子を見る必要があると考えた。また、2006年の再生産成功率が1995年以降、最も低いことから、2007年以降も資源水準は低位で推移すると考えられる。



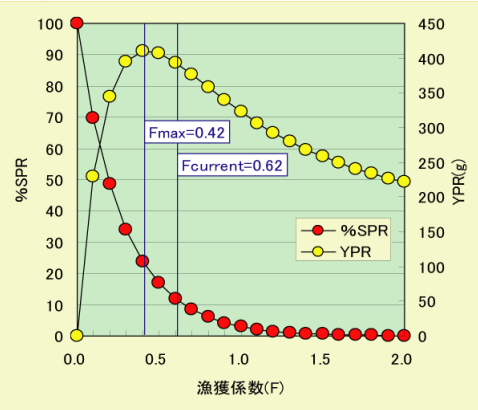


管理方策

資源水準が極めて低位であるが、全ての年齢における漁獲係数が高い水準であり、2006年の再生産成功率も過去12年間で最も低いことも考慮すると資源水準の回復のため、緊急に漁獲圧を削減するべきである。また、種苗放流は資源の底上げに貢献しており、漁獲圧の削減と種苗放流を組み合わせた資源管理型漁業が資源水準の回復への近道であると考えられる。

	2008年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	136トン	0.8F30%SPR	0.27	21%
ABCtarget	111トン	0.8・0.8F30%SPR	0.22	17%

- 漁獲割合=ABC/資源量
- F値は各年齢の単純平均



資源評価のまとめ

- 近年の資源量は極めて低水準である
- 全ての年齢で漁獲圧が高い
- 2006年の再生産成功率は過去12年間で最も低いと考えられる

管理方策のまとめ

- 全ての年齢で緊急に漁獲圧を削減し資源水準の回復を図るべき
- 種苗放流は資源の底上げに貢献している
- 漁獲圧の削減および種苗放流を組み合わせた資源管理型漁業が資源水準の回復への近道

資源評価は毎年更新されます。